

報 奇
讎 談

自來也說話

卷五

~ 13

3329

5

3
9
60
1
2
3
4
5
6
7
8
9
70
1
2
3
4
5
6
7
8
9
80
1
2
3
4

13
3329
5

報仇
自來也
奇談
說話卷之五



武江

感和亭鬼武著
高喜齋校合

大正十年八月廿九日
本大學出版部贈

五十嵐典膳逢奇怪併異人遠死靈糸

單謙曰柔能制剛弱能制強柔者德也剛者賊也弱者人之所助強者人之所攻柔者所設剛者所施弱者所用強者所加兼此四者而其真剛
これぞ鹿野苑軍太夫ハ才略を以て大勢に監視と道小くも茲西天門の
奇指きて身中あり王もあらずは是疾子影を驅し漸吳賢村を
道れ考り此道り兵山ゆくりり今峯に愛苦を越縁子人哀なる更

自來也說話卷之五上

三

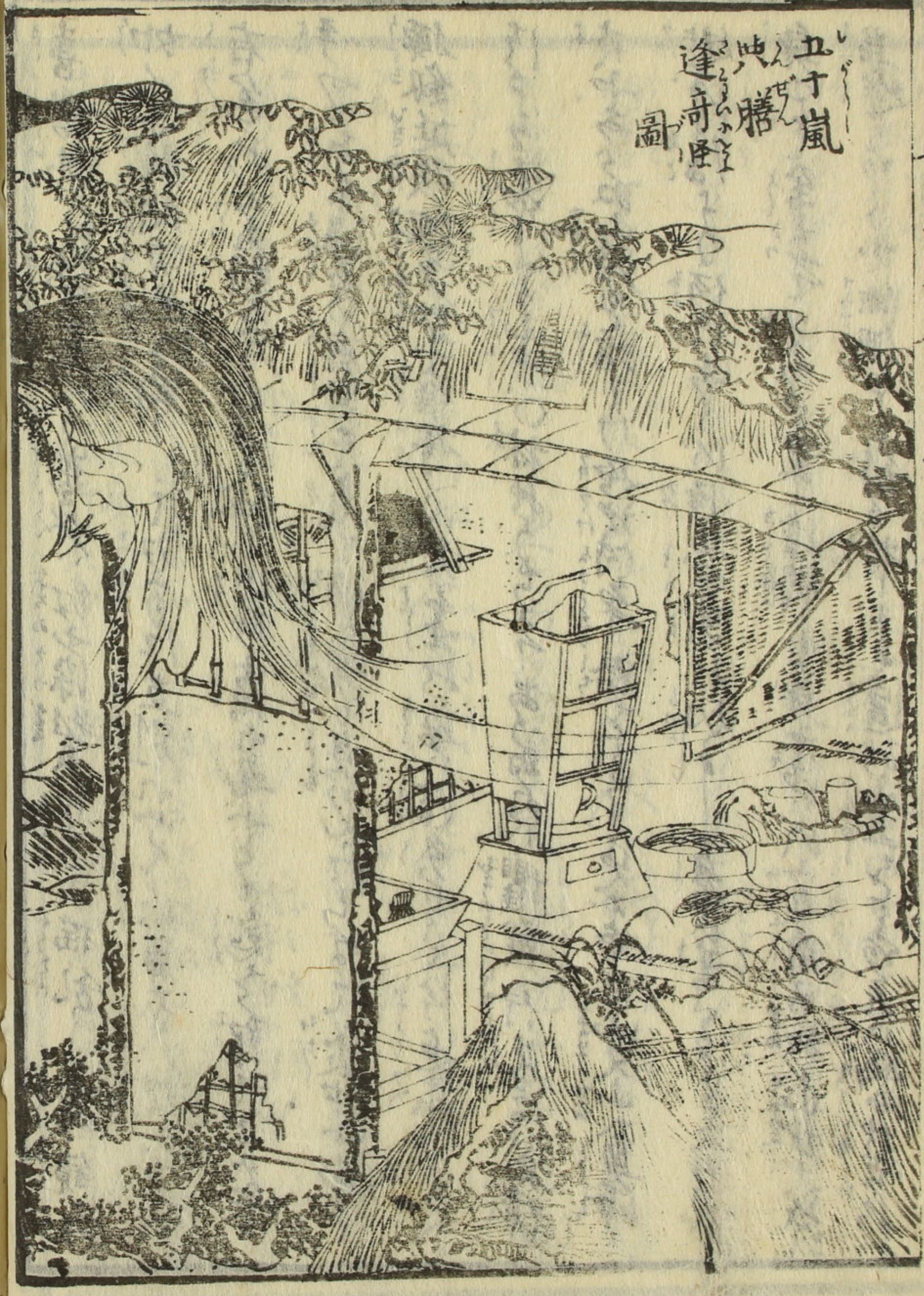
逃出日暮ぬき一軒乃草屋小到一夜の宿をとりとゆふやと
内の勤靜を被てあやうに那目あれぬいと羨鶴女は焚たのりたる
紡績うあやうなあはれはさうさだていつく道暗速し行暮ぬぬれ
路者一夜此高城報志あれと音あふ聲に那女其聲をきこせ
たふきあはれと通しをきくとあやう軍大夫喜欣悦うちふりて那
婦人と慕又官の事だ這志奈何と名に女とてつる勇源とてか
妻の衣重めて軍大夫をこころうりる懼地起とあり込り
眺つりや軍大夫何国に逃身くとも茲より我身は子淵海に借吉
羨鳥小仇を討せむと誓ふとよと小聲さる緞拈く衣袖はあは
遠めを軍大夫此懐作天あ表のあへ馳出れば白た佇と喜るは

喜樂部と源方帝が哲身紅中深髪髪方子揺乱両眼鏡み
如く子眸開刀剣を輪して双方に立別れやも水軍大夫はたあは
有念れうと相とつける秋何所遠き事とも悲を報てあはれ
手つるおふ流石の鹿野荒れは消く總のあつらへて夜中おぬ
標紐延接滅多切す羅拂へいれを盡し海濱宿せり今迄家とてく
はるらあしる中ノ林はもろもろあはぬお懼戦行はさるぬ暗
夜ふさぬ山路を踏りけ捨次何年路をきくと火をやと山又山へ奥海
逃るは海より何とあはれは後象お切り一帯はあはるといぬ
身の毛余まてさるる身を繕も身は海へ方角不知山中に
当途よりて徘徊ゆかり折ると道は山上とあはれ幽子焚たは

源方帝の虎吉の巻之三十一



五十嵐
 典膳
 逢奇怪
 圖



新ア之ぬれを軍大夫半兵力を深く那光を眼當に路を新所と
 岩を傳へ木根をこつた跡驛幸貞を倣し彼所子道附しが
 復た怪れ住家ありや木の間より差眼が岩洞の中一個の道人を
 ころころと驚かすた火を靴し香を焼書と看るさぬは山寺に住
 別し勤靜れぬ庶人よふさざれども何程か事ゆくと想ひ
 避靜行と例を立奇言申し申さんといふ那某人軍大夫と觀て
 ころころと汝者素何して夜中にかる山路を到りて世に越後の國
 妙香山の絶頂ゆく容易人の通ふをた所子流に殊更汝の
 相顔をもるに死靈の祟りありといふれを人を適し者あるか
 素名品所持倣といふも遂中らそつた光りて汝が命をいふんと

星を指する一言り軍大夫大子警に實に君を天神ある跡致々を
 奇怪に生達ひ形路の借建いしこの子さやうがき大人の道徳を
 音今此難を避玉ふは大恩死にとも忘れりすと低ひ手身して
 別はぬが那某人申や汝素稜悪の者とら看つれども早も馮心哉
 別捨ん不便あり一旦の難はぬれぬせし度く路ともとあて下は
 再び這不到事あれとあし天子向く呪文を唱へ書とあて
 虚空を拂ふと之ぬれを岩洞の好子殺あつてあはは惜や某人の
 助あぬを世切はえぬし一歩の今とさる懼に殺音して呼ある
 聲のやうを軍大夫ハ驚慄臨あはぬ人の目今の汝が身の上はか
 好く藤子ありとらぞ老早此を立退よ早に山寺あること哉

新編古今言部 五

他子泣くは汝が命を石目にて流るぬんまは於あつてあつれと
教子後い九津做一那岩洞と立出れを疾東雲のひかりし
出と吹来る風子連率多子山崎雲を傷ひ見上る岩局も責さぬ
嬉拉軍大夫一程の路を求藤ははを逃下る

自來也於妙香山子妖術併萬里野破魔之助武者修行条

鹿野苑軍大天上を逃行後夜はのくと明渡れどあとも山中
鳴動一岐雲四方に覆ひさる雷麦一く閃地さる溝に地その
中に一の岩根小櫻打掛くる六十六部金剛杖小両半をうけ山上と
懸付あつて地をせし観上る曲者率を滿く此方中を一個し土
族の象容み武者草鞋小高般名を立上り同じ上斜眼法

動靜あつげふくくる中の子あを岐雲の路下り那兩個の象は
そらに懸きて觀へ分び権あつてそそ雲も晴るそそ山へ
那岩洞と眼當と偽り躑躅六部曲者遠に看下り前の異人
忽然と岩上りあつれ宇古に謂いつつ汝這子到る早き術を
そそ書と流かきて情りあれど益城の首領を積原乃自來也ゆ
知ある上り秘法は不饒をとり城使と云々天晴義氣あは
志少也で當一術を授げ前面来とつりれを自來也大子感
りそそ子怪者乃大人我術も某城使の首領自來也さて
遠の山峯より觀るはあつ一個の士子何をう教諭をうとんけ
そそ動雷電閃く光景一奇例も行ふ美人と看極みそそ

目録之免告



いんじん
人遠
死霊
圖



目録之免告

幼くして例を請ひて清修しつゝ家無事老早も夫と知れ且も法皇は
 長くる事迫言に不遠不審ま何年一例ありとも按揚ふ其か
 欣悦何れ其子不女と云を修く其子を那其人の打點自來世の
 子を弄せ指を以て呪文を認め世一例を以て味方とめづり
 ことの得ひ千万里を滿とも世々又を掌中子あて之ん中は
 其人を想ひしをもて云を折く時を以て子來くる奇例の
 一可慮を以て女子傳り多し老早世物を立寄りて予に贈りて
 りの事を必く他子河より復世例を消ん中ら小蛇といふ
 とも蛇は血吸を手中に酒と紅を忽ち例ハ其を吞んこ
 傳り後其松新子始修立間以前之士傳り其傳くる蝦蟇は

幼例を以て少くして家無事老早も夫と知れ且も法皇は
 保義が武例修行の路中國への上着り益被自來也異人ありとも
 其生捕りて一糸と立奇人新着りも異人か喝呪文子
 其者三個乃客來を何国ともて之を以て其子
 自來也知例集小賊併各加邑晋藏家族入余
 去程に自來也と妙香山あり異人子出遭妖術を以て先冥東へ
 趣んと上從の國ハ幡が遠り子到りて迫来其乃金子はしりれ那
 異人子傳りし例を以て先小賊を集めて一働做んと名ある小賊其意子
 想ひ手中に呪文を忍掌を以て四方を招ハ不審や項に散乱せる
 益被其不世しては所不來り其諸國にあるを以て何處ともめく

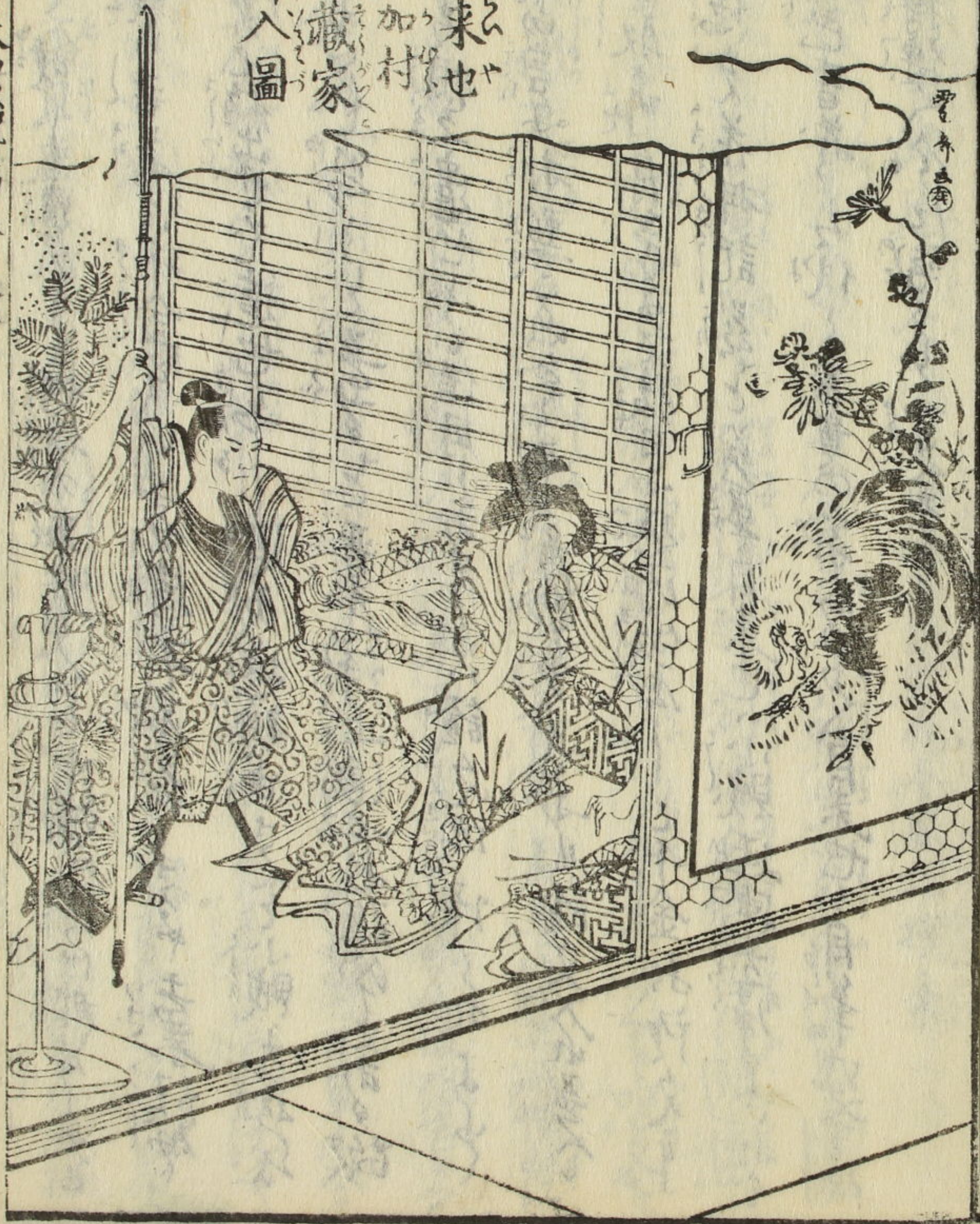
自來也説話卷之五

自來也上総乃八幡ありと聞ゆれを馳まうさあつと諺る哉
やうて自來也も奇代其術とん子修候法亦後此程近地安房國
多知山の街に各加色晋花といへる街人を富家の由國に這入
金銀銭奪ひぬると許多る小賊を從へ那地子到り或は晋花の家
換入交内乃男女を逃し縊り上奥深く忍び入り主人の森間と送く
障子の内子地を越へ入りて自來也まつりて茲を拜ハ違向に主人
晋藏蠟燭基四下に与り大腰銀を帯て手鐘を延提床机に押打掛て
悠々としてあつはるさぬ一曲つりてを乃り為旦例り妻とてつり
婦人の蘿乃小細に括してまわつて切先ハ形勢ハ自來也も
西個乃勇氣此れも子推し一踏まつてを主人晋花聲を掛何奴は
源叔子換入交内がさりと噪をと確と眺み自來也ハ街家ハ不似合る哉
奴ハ想ひぬるる帯を尾形周馬とらる浪士ある聊馬と女は子細有る
ありしと答れども浪士某ハ損度と何用加そ申せ聞くと尋るに
自來也いつて〜と浪士ハ尾葉を枯し世渡入る所見せむと云ふ
おの汝乃之れを富ると聞て金借用の多かり〜と尋る事何
うけおれあつと尋ると聞て晋花微笑其用乃金何程あるぞと尋る
ゆれも自來也も笑を言僅千金ゆく事是くぬし言のちちち各加村
晋花ハ其妻に子細いふも用立申す〜と尋る金子借用做んとて
尋るもの何故に家内を干渉〜を做めや不殘繩と解放ハ
汝が〜も〜けむんとゆりてを自來也も子細い〜と信ハ信漢

自來也説経卷之五十一

自來也
谷加村
晉藏家
挿入圖

晋藏家



ありやと身不侶吉名就のふれえ捕逃し夫より軍大夫の峰を
 追跑義鳥やちともあり能細搜の中或夜亡父母乃後扶にまをりく
 敵軍大夫ハ今上徳の国音信山は遠くありし西の岩とらう
 此程之皆國に到り染が動靜と竊所子近來音信山の城下は武術
 師範ハ浪士多りて孔道具も手取りせる杯鳴とすこの這便敵
 軍大夫ハ相遠りし其故や何とぬれを名就長兵衛の脱信をゆり
 源怪と一呂所持做義鳥の水死を助ありて身より矢炮とまをり
 動靜若身推津交の重寶傷矢ありる西天草とさるの軍大夫
 老早益取石おひとまをりて長き流矢佐佐木に射るを幸す
 踏込復奉にあらんも妙意と時希成行てあるまありしハ播入に
 自來也不逢なぐと何国とも形く頻りに聞やとまをりて
 恩人に巡り遭又純商儀もあぶりやとまをりて中より自來也
 を思案を聞小賊の中より小信例天眼磁多法といふのを追跟
 呼くしとくは是より音信山は峰下に到り那劍術者と軍大夫と
 又る坊くが術をゆり追は跟は西天竹を奪ひ取持と其奴が影退し
 此邊之非来るなり夫は侶吉義もこの道にゆく吉丸とて待合
 せよと先圖り天眼畏りゆと旅客解し出まき音信山へと急行
 此前に侶吉義鳥軍大夫を搜徘徊路途且弱を跟は馬士ハ我杯
 是法の喧嘩とけ種種く難子逢事ゆれとも丁教迄て誓ふを

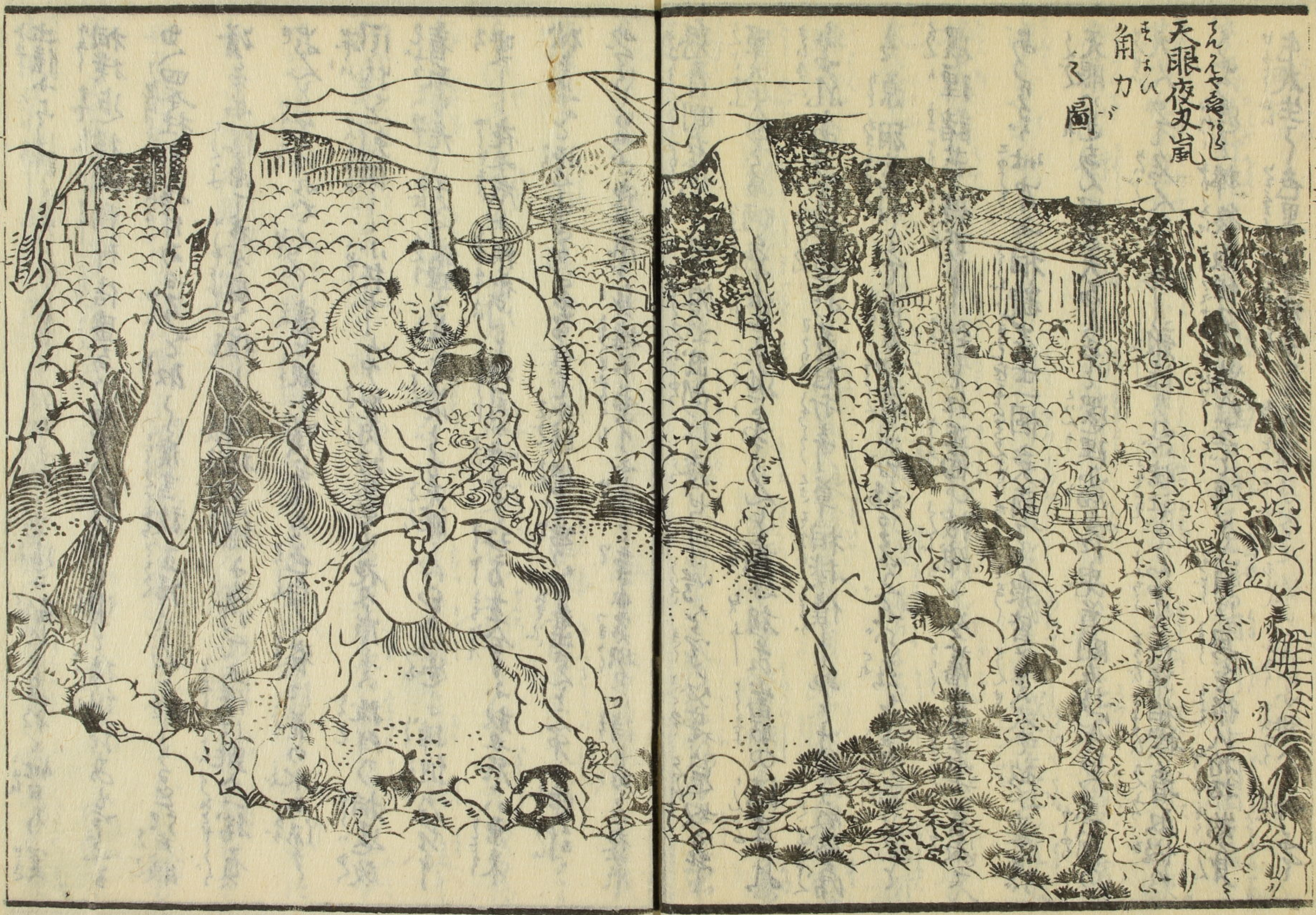
此程之皆國に到り染が動靜と竊所子近來音信山の城下は武術
 師範ハ浪士多りて孔道具も手取りせる杯鳴とすこの這便敵
 軍大夫ハ相遠りし其故や何とぬれを名就長兵衛の脱信をゆり
 源怪と一呂所持做義鳥の水死を助ありて身より矢炮とまをり
 動靜若身推津交の重寶傷矢ありる西天草とさるの軍大夫
 老早益取石おひとまをりて長き流矢佐佐木に射るを幸す
 踏込復奉にあらんも妙意と時希成行てあるまありしハ播入に
 自來也不逢なぐと何国とも形く頻りに聞やとまをりて
 恩人に巡り遭又純商儀もあぶりやとまをりて中より自來也
 を思案を聞小賊の中より小信例天眼磁多法といふのを追跟
 呼くしとくは是より音信山は峰下に到り那劍術者と軍大夫と
 又る坊くが術をゆり追は跟は西天竹を奪ひ取持と其奴が影退し
 此邊之非来るなり夫は侶吉義もこの道にゆく吉丸とて待合
 せよと先圖り天眼畏りゆと旅客解し出まき音信山へと急行
 此前に侶吉義鳥軍大夫を搜徘徊路途且弱を跟は馬士ハ我杯
 是法の喧嘩とけ種種く難子逢事ゆれとも丁教迄て誓ふを

略之

さよ鹿野苑軍大夫に叛後の難と避て上総の国に到りし音信山の
其以仁木重房に城下りて専武術行を中中承り傳を承
音信山の街家より武術の術の者として仁木の藩中と授
減子牛や力あもれに弓を流をも対子減谷大王と名
杯子做るをりり人々敬む代お人々と奇仗せし軍大夫
大子申さき又く名も鬼首剛直と改城り子道場を建武術
陣敷ありてそのりり子信也も天眼儀共流の自奉世の以圖子任
音信山子到因所柳の馬切子子思理とて能信師ありし事
知音ありあり信也も茲子道留做一軍大夫の秘傳とて

鬼首剛直といふ浪士武術に達せし時必ず遠奴を
軍大夫ある何年樂子進多くと想し相取當形の法を此
多孔ありて近道は着冠打草相撲儀に如くその取後
之原朝花門といふ角力切者より結多とて其を看取せんと
還理諸若彼形に到りしに正面の横浦中を藩中若士看取て
あつらふ世中子相貌尖士一個交有る衆皆大人と故き事
天眼の星ある軍大夫ありて還理子向は鬼首剛直といふ武術の
大人といふ名あるなり新活り此法社といふ中子伏躍相撲看取
るも近き棒後取組又ハ跑の事といふ一日に身をも信以拍物
生太生り色黒筋痛する大漢子夜又誠し言ふ跳入と呼ぶ

天眼夜叉嵐
角力
之圖



土俵より許さず侍着るに手小做りも這敵に力あらず日乃笑
 相撲近投跟精神倍盛なりぬき不誰りし擧と捕組へたあもつら
 由四本柱より柱月あらずと取ら度言放去帰らんとぬりしを天
 儀多し博東に夜女嵐を権しと呼ばし裸子ありて土俵に跳入一掃負
 せんとやゆれぬ人遠と観ふ儀を色白く春に花の水子添
 風情を刺徹し小共より少堅肉のむきも夜女嵐と援拜乃相遠故
 看取も先く足之速理もあし止れども天眼くけしは遠子捕組なかり
 変一夜女嵐今朝花のし行司が呼あつ双方交合ふ取女嵐ハ京来
 破まゆと怪しむるさあぬれも天眼樂があつと着出さんと弟子速可
 めづりいぬ夜女嵐が身持不中なり言とさきあ家柳の待と越る夜女嵐
 尻居にさめて土俵ぬるを看取の疾朝花のし擧をさあぬれも夜女嵐
 せ地まきく幾回も改まらば子笑掛けも天眼持し落自不々合時方をと
 らし言と突掛ぬ夜女嵐も同じま上りか先刻より身持てあぬ
 海く投出さんと鳥標しぬるを身外されあせり極て蹴城を列に懸れ後
 那れ千夏美北千と衆し権し列を移しけは看取の諸人は咄と春
 下りやと観るうち刀方罵り組ぬる儀もあつたお嵐は約の遠に
 りつと今ハ天眼負あんと想ふもよ儀もあつた顔と取頼に始ぬ高きと
 ぬみ嵐は言一切でと力成揮し衆も餘と跟込ぬと揺つと身を沈む
 めと足厚が大漢子に夜女嵐の顔倒し土俵の中央へ頭顛倒し地層を
 打倒され権し正氣を多しとさあぬれも看取の諸個一同に咄と喊声は

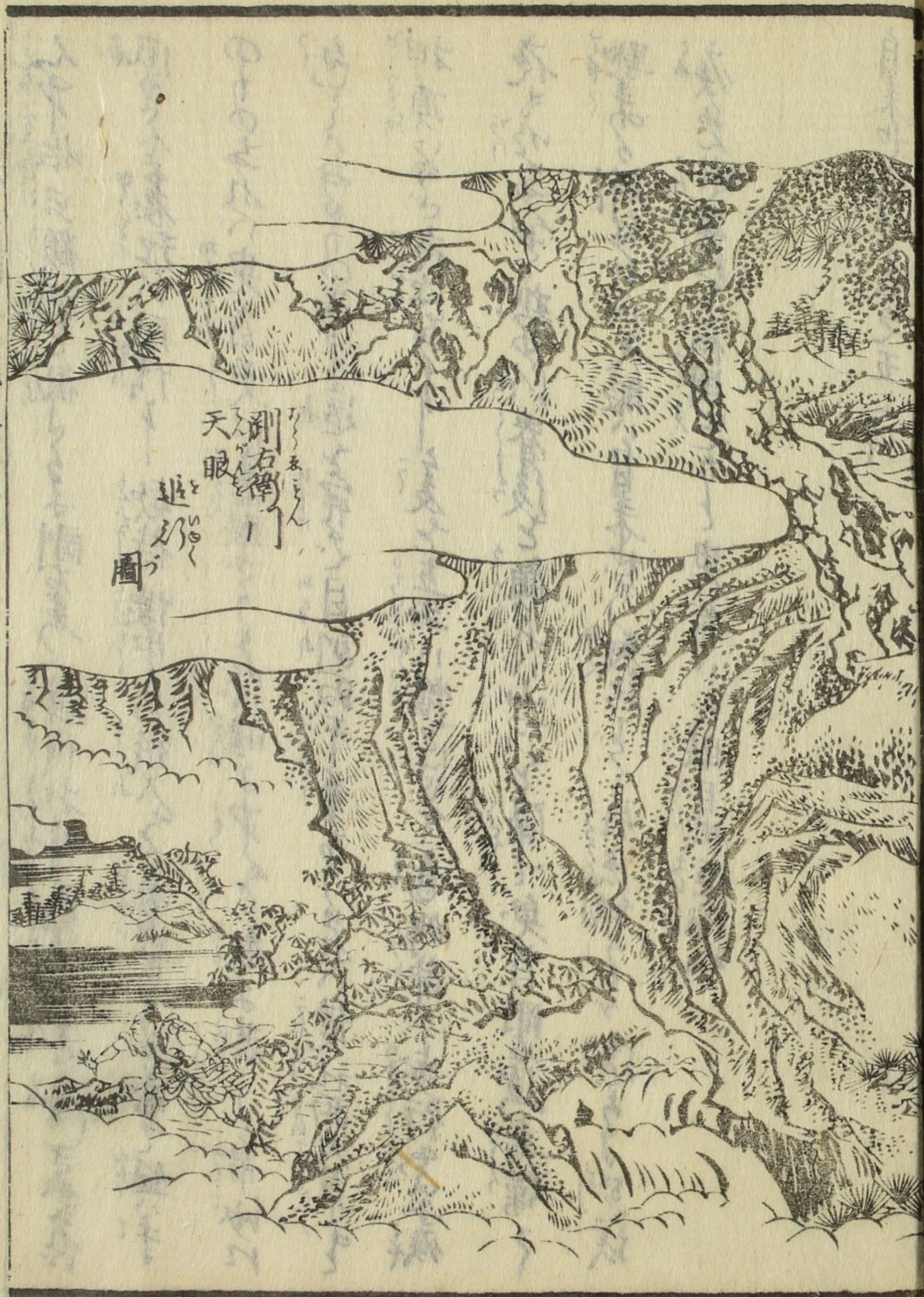
自來也説古卷之五上

五

權く鳴り歌ふりり物々に鬼首剛在(一)ハ差一同らおぼろげなる者も感す
朝花門を夜賜と遣しはれ天眼能眼之所と大子信に運に城陣より
到り厚く謝しゆを剛在の核をへ呼上り大盛を運りて天眼押負ひて
教五を頼るる女小気味能僕子かこ衆皆言立居留め申多し遊遁剛在
宅に美ししとありしを僥倖と穢言手と突刺半馬頼度子細もさふ
ハ何来日も感へ推存供くし約しつ昨日ハ別れ明きも速に調度做し
剛在運の室子到り却と申しり別も為五目へ呼入無き数持り申す天眼
とくく過日も申上り通某一の終申す何卒奇者門人として来て到術家林
徒行は度々をささくし世儀許容温くしやと尋ふに鬼首打嘆い出れハ
相撲の手技より行向し記でささくし徒ある世もぬ出精次守一廉の武術者
流るる一も系奇者と傳へて技も傳へ異人いと答はれハ天眼太子欣悦
這より剛在運の奇者門人として目く門人の村中も出專出術の修め做
氏障りも舟子も僕もあつ別業の書三個もあつて是れ佛く鬼首此
意子叶いさふらふと剛在此動靜と看るる不審子音術と行ひ門人を整せ
ゆる光景毎是西天竹乃不お如く何卒折と定規以盛取らふやと妻夜んを
つけて疾く我が剛在運外に拒れ懸酔しつて厚く天眼對手に欺れ懸運採
しつて又一盃を酌んと申りて運に酒者を潤し出せ勸くハ大備酔あり
武術の自賛多し(一)家(一)好希山まで幽室より遭夫より吳人全達一車後
武者修術の刻事情しつて所そ武術の流るる人を運るるを供り
酔ひ申り口より先程の手柄話を聞くと天眼ハ佐社軍大夫に相違りし

自是也鬼首奇者(一)三二

(一)



剛右衛門 天眼 遊乃 圖



自來七音言卷之三十一

七

人市^{しんち} 怡^い 只^{ただ} 顧^こ 酒^{しゆ} と 勸^{すす} 々^々 子^こ 剛^{ごう} 策^{さく} 其^{その} 後^{のち} 打^{うち} 母^{はは} 前^{まへ} 後^{のち} 不^ふ 定^{ぢやう} 人^{にん} 傳^{でん} 言^{ごん} 多^た 矣^や
 風^{かぜ} 々^々 全^{ぜん} 震^{しん} 起^き 風^{かぜ} 情^{じやう} 一^{いつ} 欺^き 待^{たい} 懷^{わい} 中^{ちゆう} 乃^な 紙^し 入^{いれ} を 着^き 出^{いで} せ じゆ 巻^{まき} て 益^{えき} 八^{はち} 手^て
 の 力^{ちから} の あ れ 六^む 鬼^{おに} 首^{くび} 更^{さら} に 意^い 限^{げん} ぶ り 六^む 暗^{くら} 子^こ 中^{ちゆう} を 被^{おほ} 子^こ 恭^{こう} 一^{いつ} 帛^{はく} 沙^さ に
 包^か じゆ り の 力^{ちから} の あ り し 遠^{とほ} と 在^あ り 目^め 訓^{くん} 取^と 干^{かん} 葉^{えふ} あ り 六^む 僕^べ 社^{しゃ} 西^{せい} 天^{てん} 草^{そう} 子^こ
 押^{おし} 頂^{てい} の 方^{かた} 夜^や 涼^{りやう} あ り 一^{いつ} 反^{はん} を 立^た 出^{いで} 八^{はち} 幡^{ばん} と け 一^{いつ} 意^い 僻^{へく} 静^{じやう} 子^こ 歩^あ 行^ゆ 走^{そう} 疾^{しやく}
 夜^や も の 多^た 矣^や 想^か 女^に 以^も 脊^せ 後^{のち} と 顧^こ 六^む 山^{さん} 一^{いつ} を 備^ひ 一^{いつ} 鬼^{おに} 首^{くび} 剛^{ごう} 在^あ り 鳥^{とり} 燦^{さん} 々^々
 馳^ち 美^み あ り 解^{かい} 女^に 六^む 天^{てん} 眼^{がん} 自^{みづか} 来^き 也^{なり} 乃^{すなは} 教^か 於^に 一^{いつ} 孤^こ 遠^{とほ} 傲^{おご} り 六^む 遠^{とほ} 子^こ 只^{ただ} 一^{いつ} 埃^{あひ}
 夜^や 先^ま 逃^に 出^{いで} り と 何^い 国^{こく} 逆^{さか} 力^{ちから} と 鬼^{おに} 首^{くび} 六^む 天^{てん} 眼^{がん} 目^め 拭^ぬ 追^お 跑^{はし} ぬ

自來也言言卷之五上終

